

感染率欧米の200倍、療養所再建急務

ハイチ大地震で被災し、キャンプ生活を人々の間で結核が急速に広がっている。感染状況は世界で最も高い比率という。療養所や病院も崩壊。患者はテント張りの臨時施設での入院生活を強いられ、医師らは療養所の再建が急務だとし、国際支援を呼びかけている。

(ポルトープランス＝平山亜理)

ハイチ被災地 結核感染拡大

ハイチの首都ポルトープランスに、1982年以降HIV(エイズウイルス)や肺炎感染の治療や研究をしてきた医療機関、ゲスキオセンターがある。結核患者の約5割を引き受けている感染症の専門病院だ。

地震直後から、病院の敷地内を被災民のためのキャンプとして利用、約7千人を引き受けたが、4月までに66人の結核患者が見つかった。10万人当たり942人、欧米諸国

平均の200倍近くになる。結核は感染力が強いため、同じテントで暮らす人々に広がっていた。マフリア患者も20人いて、下痢を訴える人は3千人に及んでいた。センター長のジャン・ウィリアム・

パプ医師(62)は、「雨期になり衛生状態が悪化し、さらに広がる可能性がある」と、危機感を募らせる。

患者がせきなど症状を訴えてから来院するまで待つては感染が広がる一方なので、同病院の専門家が各被災者キャンプを巡回し始めた。ハイチでは、首都から西に

30キロの震源に近いレオガン近郊シグノにあった国立結核療養所も地震で倒壊した。日本人医師で修道女の須藤昭子さんが、ここで30年にわたって、結核やエイズ患者の治療に尽力してきた。

ここに入院していた患者の多くは、首都の米国大使館近くの敷地に設けられたテント張りの仮設病院に移動した。

このテント病院に入院する結核患者は80人。うち25人は結核を併発したHIV感染者で、その中の20人は複数の治療薬が効かなくなる多剤耐性結核(MDR)だ。半年間は入

院し、2年間にわたり治療できる施設が必要だという。

ゲスキオセンターで研究員をした経験があり、地震後も国際緊急援助隊の一員として現地治療にあたった長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授(46)は「国際保健学」は「ハイチは元から結核が流行していたが、大地震で治療が中断した上、狭い場所に大勢が住むなど、悪い状況が重なった。復興が進んでから治療を再開しても、薬が効かない結核菌が見つかる恐れもあり、早期の対応が必要だ」と話している。